Fancy Fragments oF "Fantasy" Fitted For Feasible Facts
Triologue　Fate or Fortune

札幌市医師会
華岡青洲記念病院
華岡（はなおか）　慶一（けいいち）

中・高時代の記憶として、英語私塾の主宰KM先生のことを話したい。先生には中学３年から高校２年までお世話になった。当時の住居から程近い中央区の大学の教授（東大出身？）の奥様で、自身も津田塾大の英文科卒で津田梅子の流れを汲む女子英語教育の本流に身を置いた先生だった。カリキュラムは当時としては非常に刺激的で、中学の早期に栄光学園（６年一貫課程）の英語教本――かつて日本によい教科書がないので宣教師（イエズス会）が作成した――を終え、中学３年には高校生向け小野圭、山崎貞の英文解釈研究の演習を開始していた。高校生になると英米作家の名文抜粋集やバートランド・ラッセルの評論を教材にしていた。私は転校の関係（孟母三遷目）で中学３年の初めからお世話になった。当時、札幌の２Ｆ３Ｋといった環境にいた先輩達には馴染みの話だろう。私は、ご主人の定年退官の関係で最後の最終学年だった。塾は、最初は円山にあったが最後は、伏見の古民家になった。ある時、彼女は母に「あなたの息子は塾頭だから私が不在の時には、あなたが息子と一緒に代わりの講義をしなさい」と言ったそうだ。その揶揄（強烈な皮肉）が先生のどういう気持ちから発せられ、母が真に受けたかはよく覚えていないが、確か私の進路――先生は私の医学部進学に否定的だった――に余計な口を出すなという忠告（警告？自分の亭主は医学部教授なのに！）だったかもしれない。母が自分のエゴで北大医学部を息子に強要していると思っていたようだ。前述したように、もうその頃は、母は私の将来に対して（夢はあっても）進路を押し付けるようなことはなかった。何より――あの恐ろしく高慢で、負けず嫌いの母親達を差し置いて――講義をするなど、我々にはその意思も、気力も、能力もなかった。その時の自分のクラス以外（出身小中学や高校別に複数あった）も含めた進学先を思い出すと、東大文一、上智大（イエズス会）外国語学部英語学科、東京外語大、早大政経、慶大経済・文そして津田塾大など文系の英語難関校が多かった。たまたま同期クラスに医学部志望は少なかった。また、入試の出題難易度の観点からは、当時の北大の入試英語にそのレベルは必要なかった。新渡戸稲造（『Bushido』は一読に値する）の時代は日本で唯一の学士養成機関であり、多数のお雇い米国人教師を擁し、１期生、２期生の英語達成度は入学時にすでにかなり高かったらしいが……。今気づいたが、KM先生は往時の新渡戸方里に（いろいろな意味で）そっくりだ。思い返してみると、その時、私は英語の授業（英文科講義だった）を介した彼女とのやりとりに（ゲームに）熱中していた。最初の定型的な英文法や英作文の演習はサボって（だってテキストに書いてある）、佳境の英文訳出から出席した。いかに彼女に褒められる意訳をするかにエネルギーを割いていた。ある時、ある小説の心象表現のくだりで、いいリズムの「Alliteration」で書かれた連続動詞や副詞句に格好の練れた日本語の頭韻をはめた時、彼女はそれまで目をつむり、寝ていたのではと思っていたが、弾かれたように私の方に向き直った。彼女の好物は、やはり"Iambic Pentameter"だった。それに味をしめた私は、知的ゲームとしての「Rhyme・Rhythm」に目覚め、子音に敏感になり、シラブルを意識し、高得点を狙った。楽しいゲームだった。もちろん時には馬鹿げたミスも犯した。今でもよく覚えているのは、"A widow by the window"（先ずwindowの室内描写の後で）から始まる未亡人の心情告白を、私は何を思ったか自分のFantasyの世界――頭韻と脚韻のニッチな共存に遊ぶ――に入って、以後の「Widow」の代わりに全て「Window」を主語にして――「窓」は私の空想の世界への入り口の一つだ――あたかも擬人化表現（レトリック）のように訳出した（The window by a widow!）。当然意味を成さなくなったパラグラフの辻褄を合わせようと、私は全力で新しい小説を作った。仮定法過去完了帰結節にたっぷり情感を込め、そこには書かれていない条件節を自分のラインに引き寄せて創作した。周りの同級生は「何が起きているんだ」という表情で呆然としていたが、先生は、超然として、「一体、何を企んでいるの」という目で私を見て薄笑いをしていた。彼女はある意味で（私が尊敬したメンターとして）もう一人の母親だった……。

その後KM先生とは、塾を卒業してからは一度もお会いすることはなかった。ご夫妻は出身の東京に戻られ、阿佐ヶ谷にお住まいとは同級生の女子達――先生の言いつけを守り、英語を大事にした――から聞いた。先生は後々まで私の大学・学部選択と学生生活に苦言を呈されたとも、彼女達から聞いた。……実は、私は、KM先生の思い出話をするためだけにここまで書いたわけではない。現在の私（わが家族）の存在に関係するのは、実は、一度もお目にかかった記憶のないご主人―KM教授―なのではないか、と思い当たったからである。今回、調べたところでは、教授は医大の初代衛生学教授として新生児、小児のウイルス感染症をテーマに大きな成果を上げられた。具体的には、当時、猛威を振るったポリオ（母は夕張出身で私は、出生後も頻繁に実家を訪れていた）や乳児下痢症（家族の天敵ロタウイルス）と対峙して、小児科とともに戦い、北海道のみならず、全国の子供の命を救った。まさに、医学の王道を歩んだ方（ある意味、医師として背中を追うべき父親）だった。その時はもちろん、つい最近まで思い至らなかったが、間接的に（おそらく直接的にも！？）明らかにわが家族に襲いかかったウイルス攻撃の負の連鎖（さらなる悲劇）を断ち切っていただいた確信がある。KMご夫妻にはもう伝えられないがそれが本当の因果だったと思うに至った。